高齢のアカアシドゥクラングールに対する終末期の飼育例

○栗原暖佳
（横浜市立よこはま動物園）

アカアシドゥクラングール（*Pygathrix nemaeus*）はベトナム、ラオスおよびカンボジアの熱帯雨林に生息する葉食性のオナガザル科のサルである。単雄複雌の群れを形成し、負傷に至る個体間の闘争は少なく温厚な性格を持つ。寒さに弱く、飼育下では冬期の温度管理が難しい。

よこはま動物園では1998年から雄2頭の飼育を開始し、その後2012年と2013年に雌が1頭ずつ来園したことでペア形成が実現し、繁殖にも成功した。2024年11月中旬に当園で最も高齢である28歳の雄個体（1998年来園、愛称：ラー）の後肢に異変を認めたが、社会性を考慮して成雌2頭と幼雌1頭の計4頭での同居飼育を継続した。

2024年11月19日に垂直方向への移動に異変を認め、その後は後肢の可動域が徐々に低下し、12月1日には完全に麻痺し、手で触れると冷感も確認された。そのため、群れ全体を管理しやすい部屋に移動し、翌2日から介護飼育を開始した。寝室内を清潔に保つと共に採餌の補助を行い、体(尾部・臀部・後肢)の清拭を1日2回実施した。また、床面に木製の台を設置し、高齢個体が無理なく休息できるよう配慮した。通常であれば個体を隔離した方が介護飼育は容易であるが、本種の社会性を重視し、他個体から分離することが心理的な悪影響を及ぼすと考え、群れの他個体がサブパドックを利用する時や介護作業時以外は、1日の大半を群れで過ごすことができる環境を維持した。12月10日には採食量が著しく減少し、12日には座位も保持できなくなり、翌朝に死亡を確認した。最期まで群れの仲間と同じ空間で過ごし、視覚・聴覚による個体間のコミュニケーションを保てたことは、精神的な安定や採食意欲の維持に寄与したと考えられる。本事例は、社会性動物の高齢個体に対するアニマルウェルフェア（動物福祉）を考慮することの大切さを認識する一例となった。